された。外務省版に不滿足なる事は余は嘗て指摘した事がある。隨つて一八頁註(12)に於て Dowa を Dün と讀む事が起るのである。

三三頁にミニャグが出てくるが、ミニャグは河西又は西夏に當る言葉である。後にも出てくる語である。又メニャグとも云ふ。

一二一頁、スムバ・ハンポの印度西藏佛教史はサラット・チャンドラ・ダスの校刊本カルカッタにて出版せられた。蒙古佛教史の部續刊せられる由を豫告してあつたが終に出でなかつた。

二五九頁、白頭を回教徒？とするは當らない樣に思はれる。かの有名なる入藏宣教師が白頭のイッポリト・デジデリと自稱する所を以て見れば回教徒でない。必はカシュミイル人を白頭と呼ぶんではないかとも思ふが余には詳かでない。

二九七頁、「正字學源泉」と明かに書名になつてゐるのは喜ばしい。余は嘗てフウト譯の此處を改譯せねばならない事を指摘した事があるからである。此書は現存して居り、シベリア地方で景印刊行されもした。蒙文名を「メルゲット・ガルフ・イン・オロン」と云ふ。

四二七頁、蒙古源流の原名は矢張り余は贊成し難い。江實氏の譯注を見よ。余はフウトの改譯に大體贊成して四種の書の略名を合併したものと見たいが、まだ定まらない。

以上單なる思ひ付きを書いて、詳かなる論證を抄出しなかつたのは失禮であるが、何れ又モツト研究して定まれば詳論する機があらうと思ふ。こゝではさう必要もなからうと失禮した。(西藏文蒙古喇嘛教史、昭和十五年十一月、蒙藏典籍刊行會發行、菊判四〇八頁、定價七圓、蒙古喇嘛教史、昭和十五年十二月、生活社發行、菊判四三〇頁、定價四圓五〇錢)(石濱純太郎)

Hubbard, L. E.: The economics of Soviet agriculture. London, Macmillan, 1939.

社會主義の國ソ聯邦。世界情勢轉回の嵐の中に立つて、東亞大陸政策を論じ南進日本の行手を凝視する時に、ソ聯邦は何と言つても大きな存在である。今やソ聯邦の研究は特に興味深いとも言ひうるであらう。併し、ソヴイエト共產主義社會の檢討に際して目覺しい都市工業の發展に眼うばはれ、農村に勤きつゝある情勢を見落すならば、ソ聯人民生活の理解は不完全を免れない。

近時の華々しい工業建設の反面に於て、ロシア人口の七〇パーセントは農民であつて、ソ聯邦は依然として農業國の名に恥じない。而も最近に於けるソ聯國力の急速な進展は、一九一七年の革名以來十數年の間、革命政府が實質的に握り得なかつた國内の全資源を、漸く確保することに成功した結果である。革命當初に於てボルシェヴイックは實に對農村政策に失敗したのであり、爾來流石のソ聯政府も農民を向ふにまわして手を燒いて來たのであつた。

さて、本書の記述はロシアに於ける農奴の起原から始められてゐる。既に十七世紀の半頃には確實な存在となつてゐたロシアの農奴は、一八六一年の解放令によつて自由の身となつた。その後

に於ける最も重大な事件は、一九〇六年のストルイピンの農業改革であつた。中世的土地制度の破壞、共有地の私有化を以て、近代資本主義的農業への轉換を圖り、農民の土地私有欲を滿足せしめることに依つて、農民を私有財産制度の破壞を企圖するところのプロレタリア革命運動の防塞たらしめたのである。而もその結果は、嘗ての地主對農民の對立關係に代つて、富農對貧農の對立を生じ、貧農の不滿はやがて一九一七年の革命を惹起する一原因となつた。

一九一七年の所謂十月革命の後、革命政府は內外の非常時局に際會して戰時共產主義を實行した。土地を國有化すると共に、「パンの爲の十字軍」は穀物の强制徵發を斷行した結果、遂に農民の反抗はソ聯政權の根柢を危くするに至り、一九二一年には新經濟政策、所謂ネップの採用を餘儀なくされた。このネップによる國民經濟力の回復はなるほど顯著ではあつた。併し、富農（クラーク）の勢力が漸次增大すると共に、共產主義の敗北、資本主義への一歩後退だとの誹は免れなかつた。漸く一九二七年に至つて、農業の根本政策として集團經營が採用せられ、翌一九二八年に始まる數次の五箇年計畫に於て、富農の淸算、農業の社會主義化が企圖せられると共に、かゝる國家の手による農產資源の確保を背景として、工業ソ聯の建設に飛躍的邁進が可能となつたのである。

以上の如く露國農業の沿革を克明に描きだした著者は、後半に於て、今やソ聯の集團的農業經濟制度の中核的形態となつたコルホーズ（共營農場）の解剖を、あらゆる角度から試みる。コルホーズの組織、經營方法、收穫の分配規約、トラクターの問題等につき、詳細な解析が行はれてをり、本書の重點も茲にあると思はれる。要するに、地主の桎梏から漸く脫し得たロシアの農民は、自作農となり得ずに、集團經營下において恰も工場勞働者の如き地位にをかれた。嘗ての地主の位置が今やソ聯邦政府によつて、とつて替はられたのである。

記述に於て、著者は純客觀的な立場を標榜し、著者自ら言ふ如く、自己の批判は努めて避けられてゐる。この點、論文としての迫力は少く、讀後の味ひに若干の物足りなさはあるが、淡々と而も手堅く克明に筆を進めてゐる。著者は嘗てソ聯に在住したこともあり、使用された統計資料はすべてソ聯政府公表のものであるが、その統計數字は、實施された社會主義政策の樂觀的な部面の數字が、特に好んで採用されてゐる點に讀者の注意を喚起してゐる。

現今、ソ聯邦の研究は重要であり興味も深い。併しながら、一般にソ聯研究資料は多いとは言へない。ロシア語に不自由するとなれば尙更である。ロシアに於ける農業問題は單なる農業問題たるに止まらず、實にソ聯政權の存立をその根柢から搖ぶる性質の重大問題であるだけに、本書の如きはソ聯邦の國情の理解に資するため、廣く一般に讀まれてよい好著である。

（三一六頁、丸善拔、拾貳圓五拾錢）〔三上正利〕